
転生者は時空（とき）を超えて～始まりの章～

時の秒針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は時空ときを超えて〜始まりの章〜

【Nコード】

N2397S

【作者名】

時の秒針

【あらすじ】

なんと！！過去に書いた「転生者は時空を超えて」が復活。しかも、始まりと外伝と終わりの三つのシリーズになる。

皆さん、読んでいただけたら光栄です。

感想などやコメントなどもお待ちしておりますので！！

プロローグ

そこは、戦場だった。

人と人の殺し合い……。

戦場に残るのは死体が多く、地面は血などで赤色に染まっている。

？「……酷いな」

そんな戦場にいる一人の男。

男はただ、死体を見つめそして目が少し鋭くなる。

？「争いは終わらないか……」

男は一言いうだけで姿を消した。

その男が何者で、何をしていたかなんて誰も答える事はできない。

ただ、わかるのはそこら辺にある死体はその男がやったという事がわかる。

なぜ？としか言えない……物語は動き出す。

どうも初めまして、この物語の主人公

神凧 かななぎ

白牡呂 はくおろ

今、一瞬、うたわれ ものの主人公とかステイグマと思ったやつ出て来い！！

俺のSLB……ゲフン……まあ、お話をしようか？

エッ？嫌だって？ゴメン拒否権なんかナイ！

まあ、冗談はおいといて、親父（ついでに作者）がうたわれが好きだからこんな名前になったんだ。

ちなみに、あだ名は「ハク」って呼ばれてる。

とりあえず、今俺は天界にいる。

そこ、黄色い救急車呼ばなくていいから!!

色々、事情があるんだよ……とりあえず俺は死んだらしいから。

神『おい、その人間』

ハク「はい、なんででしょうか？」

神『転生してやるから何処がいい？』

ハク「決めれるのか！」

2次元的にはどこに行くかは大抵分からないのに決められるのか……。

神『ああ……暇だから(ぼそ)2つまでならいいぞ』

ハク「じゃあ、リリカルなのはと真・恋姫無双でよろしく」

今この人（神）暇とか言ったよな？

神『ほう、では先にどちらに行く？』

ハク『リリカルなのはで』

神『よし、次は願いだが5つまでだ』

ハク『うん、じゃあ以下ので』

- 1、資金（困らない程度）
- 2、ステータスEX（例魔力ランクEXというチート）
- 3、武器創造（宝具、ビーム兵器など）
- 4、容姿（白髪のハクオロ）
- 5、オリジナデバイサー（デバイス）

神『もはや最強だな』

自分でも今、思ってた。

神『ちなみに言っておくが恋姫ではデバイスは使えんぞ』

ハク「エッ！マジで……まあ……それはしかたないか」

神『という事でホイ、デバイスだ』

ポンと投げってきて、キャッチする。

ハク「ってこれ……紅蓮二式のキーなんじゃ……」

神『おお、よく分かったな。それがお前のデバイスだが……会話などはなしでただ言うだけで起動する』

ハク「へえ……紅蓮二式のキーってことは……俺のバリアジャケットは赤色？」

神『正確に言うと赤と黒だ』

ハク「うわ、縁起わりい……」

神「さっそく、機動してみてはどうだ？」

ハク「おう……セットアップ！」

眩い輝きが辺りを明るく照らす。

そうして、輝きが終わるとそこには黒と赤で出来た騎士服を来たハクがいた。

ハク「これは……アーチャー？」

そう、F a t e / s t a y n i g h t に登場する某赤い英霊。

しかし、違う所もある。

普通なら赤いコートなのだが、そうではなく、黒いコート（赤い線も入っている）に胸には赤いギアスの紋様が描かれている。

神「どうだ、気に入ったか？」

神凧^{かんなぎ} 白牡丹^{はくおうろ} 通称 ハク

年齢 20

血液型 B

身長 175 cm 体重 59 k

容姿 ハクオロの白髪ヴァージョン。

性格 自由な性格。規律とか厳しい人間に対してはぞんざいな扱いをする。

バリアジャケットの色 黒、赤

魔力ランクEXではあるが、リミッターを自らかけているのでBランクにしている。

デバイス 『蜃気楼二式』と本人は勝手に呼んでる。

デバイスは、AIを搭載してないので喋れないがハクの声に反応して起動する。

特殊能力

ファーストモード「短剣」セカンドモード「大剣」

「サードモード」?? 「ファイナルモード」??

プロローグ（後書き）

ハク「…所々変わっているな」（ハクオ口のまね）

作者「ああ、リリカルなのはの物語も変わるぜ」

ハク「ふむ、しかし……前は……どうして消したんだ？」

作者「いやあく正直、この頃（始まり）、まだ『……』
コレが理解できてなかったからやり直したかったんだ」

ハク「そうか、作者よ……それで次はいつだ？」

作者「…ん？明日だけど？」

ハク「おお…以外に早いな…」

作者「だって、元の原稿があるしね…」

ハク「言われてみればそうだな…」

作者「大丈夫、今度もヒロインは多くいるんだからWWW」

ハク「まったく、こりないな作者も……」

作者・ハク「…それではまたのお楽しみ〜!!」

第1話「転生するのって……辛いよな」

神風白牡丹通称ハクは、現在5歳！

まあ、ご都合主義って事で……えっ？面倒だからやらないだけだろって？

それもあるんだが（あるのかよ！）……まあ、アレだ……赤ちゃんの時にミルク貰ったりとかオツムを変えてもらったりとかしただろ？

精神的に二十代な俺が耐えられると思うか？

耐えれたけどな……というか、もうヤケになってたな……。

で、現在は幼稚園に行ったりしてる。

まあ、神様の悪戯かもしれんが『高町なのは』というのが居たのは気にしないで置こう。

……と、なんかさつきから説明してるが実際は寝たフリの最中。

だって、ここの保母さん、俺が寝ないの知ってて寝かすからなあ……。

この前なんて、逃げ出そうとしてすぐに捕まったし。

はあ……とまあ何も無い日々を過ごしてます。

うん？高町なのはとは関わらないのかって？

いやだなあ〜誰が次期『白い魔王』に関わろうとするんだよ……。

ってというか、現在、この口調ではあるが……現実はどうと……。

ハク「……寝れないな」

つとまあ……口数が少ないというわけではないが少し渋い感じだな
……ってというかハクオロのマネしているだけだけど。

テケトウーに生きているのでモーマンタイ！

それから、約3年の月日が流れた。

現在、バスの中。

アリサ「それでね、なのはったらー！」

なのは「やめてなの〜アリサちゃん〜」

すずか「なのはちゃんらしいね」

女複数よれば騒がしいとはこの事だろうか？

丁度、俺が座ってるのは後ろから2番目の席。

つまり、後ろには魔王とバーニング(?)と吸血鬼がいるわけで…
…これも神の『はやく介入しろやゴリアアア!』陰謀だろうか？

しかし、残念だったな……介入する気はまだ無いとも言える。

だってさ……俺……真っ黒クロスケが大ツキライだもん!

うわ……だもんとか自分で言っというてなんかキメエ……気を取り直
してと。

まあ、介入するのは今じゃなくていいさ……闇の書終わった後以降な
ら考える。

おっと、バスが着いたな……じゃあな!あばよ。

それから約1年が過ぎました。

ええ、もう闇の書は終わって、八神はやて（フェイトも）も学校に来ています。

ですが、イレギュラーが発生しました。

なんと、リンフォースさんが生きてるんですよ……。

たまたま商店街で買い物してたのを見て心の中で『主婦か！』とツッコミを入れたことは内緒。

ここで皆さん……俺の成績気になるか？普通なら大人だから簡単なんだが……。

アリサに目を付けられたくない為に70点台と60点台でうるちよろしてる。

あと、最近、月村すずかから熱烈の視線を感じるのは気のせいだろうか？

というか、実は、月村すずかが誘拐されて俺は助けた。

その時にゼロの仮面を使ったから月村は分からないはずだよな？

月村すずかサイド

私には最近気になる男の子がいます。

神凧白牡呂君。

少し変わった名前の男の子。

他の男の子とは全然違う大人びた男の子。

話かける時はいつも『……何か用か？』という事がある。

周りの男の子たちはうるさくて正直、苦手。

私は静かに読書とかしたいからやっぱり騒がしいのはダメ。

でも、アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんと話すのは楽しい。

白牡呂君は私を助けた事があった。

私は、誘拐されて男の人達に囲まれている所に変な仮面を着けた白牡呂君が居た。

なぜ、白牡呂君だと分かったのかというと……声が思いつきりそのままであった。

私は、白牡呂君は結構ドジなのかなと少し親しみを持てました。

それから、彼は去る時に『撃っていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだ！』と言い残し消えていった。

正直、信じがたいけど……恋しちゃったんだよ……彼に。

さてと、お姉ちゃんにどうやって恭也さんを手に入れたか聞かなくちゃ！

月村すずかサイドアウト

ブルッ。

なんだ、今、背中に悪寒が……。

あっそういえば……この前においしい店見つけたんだぜ？

『理想郷』って言う店で……白髪の店主と奥さんの金髪の女性が切り盛りしてる。

たしか、エミヤシロウさんとアルトリアさんって名前だったと思う。

俺は気にしない……認めちゃダメだ……。

で、その『理想郷』の新鮮な魚が食えるから美味しいんだよ。

なんでもシロウさんの知人にアロハシャツを着た青い人が持ってきてくれるみたいだ。

気にしない……っっていうか気になるわ！！どうみてもあの作品だよな……。

運命の名前を持つ奴、たしか同じ名前のテストロッサ嬢が居たな。

とりあえず、こうして、小学校生活は終わりを告げ、次の中学生活へと向うのであった。

月村すずかはどうしたかって？学年が上がると同時にクラスが別になったからよくわからん。

私立聖祥大附属中学……まあ、この作品の主人公達が行く所だな。
でも凄いよな……フェイトのムングハツ 上からタライが落ちてき
た。

ハク「誰だ、こんなドリフのネタを使うのは……」

神「お前が暴走しそうだったから止めたんだよ」

ハク「いやいや、中学生であるムングハアアアア」 フライパン
が飛んできた

神「少しは自重しろ、この作品を18禁物にする気か？」

ハク「……するわけない」

神「間の沈黙はなんだ？」

ハク「いや、気にするな。俺は気にしない」

通学路。

俺は、ベージュの学生服を着こなして、歩く。

ハク「入学式か……」

正直に言うとダルいとも言える。

だって人生2回目の中学生とかどんだけ……このネタはもう古いな……。

校門を潜って、自分のクラスを確認しに行く。

さーてと……ゲッ！あの五人組と一緒にだとおおおお！！

なんとということだOTL。

絶望したー！この世の不条理に絶望したー！どんだけ、原作介入させたいんだよ！！

ちなみに、ハク以外の主人公達と一緒にの男達はというと……。

男子A「俺、生まれてきてよかったあああああああー！！」

男子B「俺は不可能を可能にしたんだ！」

男子C「ツククク、L、俺の勝ちだ！」

男子D「ランランルーー！！」

……で一緒にならなかった男子はというと……。

男子L「この私が負けた……」

男子M「この世には神も仏もあるかあああああああー!!」

男子N「気にしない……って気にするわ!!ちくしょう、なんで違うクラスなんだよ!!」

男子O「あんなに一緒だったのに（小学校ではずっと一緒のクラスだった）」

……とまあ、ハク以外のなのは達と一緒にになった男子は喜びに満ちている。

そう、ハク以外は……。

ハク「はあ……憂鬱だ」

とりあえず、クラスへと向うハク。

クラスに着くと、黒板に『好きな席へ座ってください』と書かれていた。

俺は窓側の席の一番後ろを陣取った。

ハク「まあ、話しかけられなければ大丈夫だろ」

ちょうど俺が座ったと同時にあの五人組がやってくる。

同じクラスの男子は、俺以外の心が一致した（同じクラスでよかったと！）喜んでいるのだろう。

俺はというと寝たフリ……だって面倒だし、それに俺の隣や斜め前はもう違う女子が座っているので安心！

その女子から名前など色々聞かれたがな……。

それから、約10分してから教師がやってくる。

ヴァルク「あー、このクラスを担当するヴァルク・ゼロだ、よろしく頼む」

周りかというと「よろしくお願ひします」などといっている。

ちなみに俺は小さい声で「チヨリース」なんて言ってみたり……先生がこっち見てたが気にしないでおう。

ヴァルク「では、まずは、体育館の方に移動となる、では、出席番号順にならべ」

と皆ぞろぞろと廊下でならんで行く。

体育館。

ふう〜……なんで校長の話って眠くなるんだろうか？

なんか、催眠術でも使ってるのか？

と、前の男子達の声が聞こえてくる

男子A「そういえば、隣のクラスにあの五大美少女さんがいるんだってよ」

男子B「えっ？マジかよ…隣のクラスのヤツ羨ましいな」

男子A「そうだな、後からちょっと見にいかね？」

男子B「了解」

そんなくだらない話を聞いてた俺はため息が出た。

まったく、馬鹿だな……。

魔王、死神、夜天の王、バーニング（？）、吸血鬼に手を出すんなら死に行くような物だろ。

アニメだったから良かったものの……現実となるとヤバイだろうが。

とまあ、説明などや校長の挨拶は終わり、教室に戻って帰るだけだ。

第2話「変化……なんだこれ？」

教室。

ワイワイと騒ぐ教室。

ヴァルク「あー、新入生として、はしゃぐのはいいが……程々にな？」

生徒「はい！」

ヴァルク「じゃあ、連絡事項を伝える」

それから、明日での授業の予定や色々この学校の説明などを話している。

ちなみに、俺こと、ハクはというと……。

ハク「……よっしゃ……アラクネに勝ったぜ（ボソッ）」

隠れてゲーム「BLAZBLUE」をやっていた。

使っているキャラは『ハクメン』と言われる英雄。

ハク「……やつとハザマか」

最後の敵と対戦でみごとに勝利……と言いたいのだが。

ヴァルク「かーみーなーぎー？」

ハク「ッ！？（いつの間に！この俺が後ろを取られた！）」

ヴァルク「ゲームをするとはいい度胸だな？」

他の生徒「……（ドキドキ、ワクワク）」

ハク「あ……これは「俺にもやらせる」……へ？」

ヴァルクは、ハクのPSPを取り、BLAZBLUEをやり始めた。

選択キャラは、ラグナだった。

他の生徒の心（ッて叱るんじゃないくて、アンタがやるのかよ!!！）
は一致したんだろう。

ヴァルク「いやいや、これは面白いな……今度買うか…神風！その時は対戦な？」

ハク「は、はあくわかりました？」

それから自己紹介をする事になった。

自分は、6番目…前に相川、伊藤、宇都宮、大田、小野、神凧（俺）
と言うわけだ。

…で俺の番ってわけだ…アレだ、脇役の自己紹介は飛ばされるっ
てヤツだ。

ハク「神凧白牡呂、親しい者にはハクと呼ばれている…短い間（
1年間このクラス）だがよろしく頼む」

数少ないパチパチと拍手される。

その中で一際目立つのが月村すずか…というか、アイツ目が赤く
なっていないか？

正直、俺を見る目線が怖いんだが…。

俺って恨まれるようなことしたか？助けたのは覚えてるが…顔隠
してたしな。

次々と自己紹介されていく中で月村すずかの出番が来た。

すずか「月村すずかです、そしてハク君の嫁です」

先生はというと……。

ヴァルク「……」

隠れて、メールを打っていた。

しかも、真剣に……。

ハク「とりあえず、落ち着いてはどうかね？（某赤い英霊）」

男子達の殺気が目がこちらに来る。

ハク「ふむ、まあ……君達もお年頃だからその気持ちはわかる」

男子A「（いや、アンタも同じ年だよ!）」

ハク「しかし、私達はまだ中学生だ……結婚など出来るわけなからうに?」

男子B「まあ、確かにな……」

ハク「月村すずか嬢が好きならばおもっいきりアタックして自分を見てもらえばよかるっ?」

男子C「ああ……」

ハク「それに人生はまだ長いのだ……これから素敵な出会いがあるかもしれない……諸君に栄光あれ」

男子達「」「」「ジーク・ハク！ジーク・ハク！」「」「」

男子達「」「」「オール・ハイル・ハクオロ！オール・ハイル・ハクオロ！」「」「」

ハク「……（計画通り！）」

そんなこんなことがあって、一日が終わったのであった。

ん？無理矢理終らせただろうか？そんなわけ……まあ、あるんだが……。

でも、あの後、家に帰って……テレビを見て、夕飯食べて、風呂に入り、寝た。

普通だったしな。

次の日。

いつもどりの朝……と言いたい所だが。

ハク「なんで……いる？」

そう、現在ハクが準備をして家に出たら……月村すずかが居た。

すずか「一緒に逝こう？」

ハク「……ああ（アレ？）行こう』な筈なのに『逝こう』に見えるのはどうしてだろうか？」

それから、二人で通学路を歩いていくと待っていたのか…五大美少女の四人がすずかを待っていた。

俺は、とりあえず、先に前に出て歩く。

その後にすずかが付いて行く感じになって、その後に四人が付いてくる。

ハク「……（どうしてこうなった？）」

……でいつの間にか、五人組の中心の位置に居たのであった。

はやて、アリサ、すずか、俺、フェイト、なのはという並びになっている。

はやて「……………」

アリサ「……………」

すずか「……………」

ハク「……………」

フェイト「……………」

なのは「……………」

なあ……………俺は何かしたか？

殆ど皆無言だ……………。

気まずい……………。

アリサ「……………で？すずか、なんでソイツがいるのよ？」

すずか「ダメだった？」

はやて「ダメってわけやないんよ……………ただ……………」

フェイト「ほら、彼にも悪くない？」

すずか「そっか……………ハク君」

ハク「ん……なんだ？」

すずか「私達と一緒に嫌？」 目をうるうるとしている。

やめろ！そんな目で俺を見るな！俺のライフはもう0なんだぞ！！

ハク「いえ、そんな事はないです……ッハ、今、何を……」

即答した後に正気に戻るハク。

すずか「ありがとう、ハク君」

腕に抱きつくすずか。

他の四人は呆れた顔や苦笑の顔だった。

教室に着くと俺はすぐさま自分の席に戻り、なのは達から離れる。

ハク「やれやれ……」

今日から授業がある。

朝に少し集中力を使った為に少し眠たい。

だから、ハクの特技『目を開けながら寝る』を発動。

これは、精神的に寝てはいるが体は起きているという技。

約3年間で習得したぜ？

一時間目は国語。

女性の先生で優しい先生だと言う認識がある。

ハク「……………(ZZZZ)」

チャイムが鳴ると俺は意識を取り戻す。

ハク「……………ふぁ……………」

少し欠伸が出たようだ。

次の時間割は体育。

先生の名前は『猿飛佐助』まるで戦国時代の武将のような名前の先生。

そして、身体能力も高い。

佐助「これより、体力テストを行なう！」

男女混合でやるが……………男子（ハク以外）は女子の所に目線が行く。

それもそうだろう……なにせ……。

ポイントポイント。

男子全員「……うおおおおおおお！！」「」「」

フェイト・T・ハラウンが走る度にハク以外の男子が反応する。

ちなみにハクはというとストレッチをしていた。

ハク「これぐらいでいいか？」

ずいぶん、筋肉が柔らかくなったと思うのでそろそろ止める。

やり過ぎはよくないと言うしな……。

佐助「よし、神風以外は校庭十週な（笑顔が怖い）」

男子達「横暴だああああ！」

佐助「何か言ったかボウズ？」

男子達「いえ……」

それから、男子達（ハク以外）は疲れ果てた顔で十週を終える。

ハク「……（バカだなこいつ等）」

一瞬、他の男子をそう思うハクであった。

さて昼になったんだが……担任のヴァルク先生と体育の佐助先生に捕まってしまった。

ヴァルク「はあくどうしてウチの男子共はああなのだろうか？」

それは、前の授業のオリエンティングでの話。

このクラスで親睦を深めようとヴァルク先生は考えた。

……で思いついたのが『演劇』しかも内容が五人の姫が一人の騎士に恋をするお話。

来週にもう一回、オリエンティングがあるのでその時に本番というわけなのだが……。

役者に困っていた。

まず、五人の姫はすぐに決まってしまった。

まあ、言わずとも分かるだろう？なのは達だ。

……でだ、騎士役に誰がなる？と聞いた瞬間。

ハク以外の男子が一斉に手を上げた。

それから、騎士役は保留となった。

佐助「元気がいいのは確かだがな……はあ……」

ハク「…で、なんで俺がいるんですか？」

ヴァルク「あのクラスで一番まともなのがお前しかいないからだ」

ハク「……はあ？」

佐助「もぐもぐ……確かに神風は他のヤツと比べると『普通』だな」

食事中

ハク「…ッ！」

佐助「まるで『普通』を偽ってるような感じだな……」

ハク「……いつ、気付いたんですか？」

ヴァルク「俺は最初だな……あからさまに不自然だったな」

佐助「さすが、ヴァルクｗｗｗｗちなみに俺はこの前の体育の時な」

ハク「……（なんだ、この教師達は！！こんなイレギュラーがあるなんて！ツク……今やっとイレギュラーの登場に怯むルルーシユの

気持ちが分かった)」

佐助「つと、まあ……そんな事はどうでもいいとして、ヴァルク先生の『演劇』についてだ」

ヴァルク「一応、適任者はいるんだがね……」

そうすると、二人の視線が俺に向く。

ハク「……なんか、嫌な予感」

それから、なんでか先生達と昼食を一緒に食べて教室に戻る。

第2話「変化……なんだこれ？」（後書き）

語字があれば教えてください。

第3話「ユーノって……いいヤツ? (でも淫獣)」

色々あり、中学校生活にも終わりが来た。

ちなみに、中学校でのイベントの様子は『外伝』にて投稿するから!

えっ……メタ発言するなってか?

気にしないで貰いたい。

あと、実はユーノ・スクライアが目の前にいる。

いやあく優しい少年そうだ。

だが、淫獣なんだよな……。

ユーノとは、街中で会った。

彼は、道に迷ったらしく……道を教えて欲しいと言ってきた。

俺はというと……『どこに行きたいんだ?』と言う。

ユーノ「私立聖祥大附属中学に行きたいんです……今日、卒業式ですよね?」

ハク「ああ、確かに……俺もだがな」

ユーノ「よかった、出来れば案内してくれないかな？友達が卒業するから」

友達って事は、なのは達か……。

ハク「じゃあ、付いて来てくれ……」

それから、他愛もない話をして、私立聖祥大附属中学に到着する。

ハク「じゃあ、俺はこれで……」

ユーノ「あつ……よかったら君の名前を教えて貰えないかな？ちなみに僕はユーノ・スクライア」

ハク「俺は神風白牡丹……ただの中学生だ」

俺は、教室へと向かう。

ユーノサイド

ユーノ「ただの中学生か……」

僕はさっきの生徒にリンカーコアがあると云う事がわかった。

しかも、なのは以上の魔力保持者ということも……。

ユーノ「神凧白牡丹……」

いつもなのはやフェイトなど……幼馴染の女の子達がメールで必ず話題になる人。

僕は少し嫉妬していた。

彼は、僕と違って学校でなのは達と通えるというのが……。

まあ、僕の初恋……というか勘違いをした相手がなのはだったからね……。

同時に彼に興味も持てた。

彼女達が愛する人かもしれない人物を……。

ユーノ「なのはに……リンカーコアについては言わない方がいいみたいだね……」

彼の人生を自分が曲げるわけにはいかない。

もし、教えでもしたら……なのは達は管理局に勧誘するだろう……。

ユーノ「出来れば、男友達として次は会えたらいいかな？」

自分に男友達と言えるのはクロノかザフィーラぐらいしか居ない為にちよつと心細かった。

ユーノ「またね、神風白牡呂君」

ユーノサイドアウト

ハクサイド

ハク「さて、どうするか……」

このまま、何もなく高校に行くのもいいんだが……それはそれで、もったいない気がする。

ハク「しかし、管理局に入るには……リンディ・ハラウンに会うしかないのか？」

一人そんな事を考えていたら、急に世界が変わったような景色になる。

それはまるで灰色のような世界。

一つの光が現れる。

俺の目の前で光り輝き、何かを伝えようとしている。

ハク「なんだ……これは……」

俺はそれに触れようとしたら、光が大きくなり、目を瞑る。

ハク「ツク、一体何なんだ!」

光が収まったみたいなので、目を開けてみるとそこには光はなかった。

代わりに、手の甲になにやら紋様みたいな物が描かれていた。

ハク「これは?……はあ、わけわからん」

しかし、この紋様がある意味『戦争』の始まりになるとはこの時思ってもいなかった。

……で、実は、管理局がつてもリンディ・ハラオウンじゃなくて別の人が来た。

名前はバツカス・ゲリアル提督という人だ。

この人はどうやらこの世界で3人も優秀な魔導師が出現した為に人材確保に来ていた。

たまたま、買い物帰り目を通った俺にリンカーコアがあるのを気付いて勧誘してきた。

バッカス「どうかね？白牡呂君？」

ハク「了解、俺はアンタの下に付けばいいんだろ？」

バッカス「ガツハハ！こりゃあ意気がいいのが釣れたなあ！！」

バッカスは満足そうにい笑う。

ハク「（しかし、原作にはこんな奴いなかったはず……ここでイレギュラーか）」

それにしても、リインフォースの時といい……まったく世界は本当に面白いな。

ハク「バッカス提督！これより神風白牡呂は現時刻より貴方の部下とならしてもらおう！これからもよろしくお願いします」

バッカス「いいぜえ！鍛えてやるよ……そりゃもう管理局に名を轟かせる位にな！」

こうして、俺は管理局入りになった。

第3話「ユ一ノって……いいヤツ?」(でも淫獣)「(後書き)

ハク「だいぶ、変更したな?」

作者「ああ」

ハク「バツカスってのは?」

作者「こちらが作ったオリジナルキャラ……まあ、イメージはゲンヤさんに近い感じ」

ハク「そうか」

作者「次回からストライカーズになります」

特講「俺と友と墮天使」

全部、ハク視点です。

ストライク・アルビオンガンダム

全高 17・23 m

重量 85・4 t

装甲材質

ヴァリアブルフェイズシフト装甲

ラミネート装甲

動力源：ハイパーデュートリオンエンジン

武装

MA - BAR73 / S 高エネルギービームライフル

MX2200 ビームシールド×2

MMI - GAU25A 20mmCIWS

メーザーバイブレーションソード(MVS)×2

スラッシュハーケン×4

特殊装備

ニュートロンジャマーキャンセラー

ランドスピナー

エナジーウイング

武装モジュール ミーティア

機体説明

SフリーダムとランスロットAを元に作られた機体。

機動性に優れていて、その為に破壊力のある装備は無いがMVSや
ビームライフルなどを使い分けて戦う。

ミーティアを付ける事が可能で、その時にエナジーウイングは停止
状態にしないといけない。

さあ、バトル！スタアアアアアアアアアアアアアアアアアトオオオオオオオオオオオオオオオオ！。

戦場は、廃墟の街。

そこに二機のガンダムが立っていた。

ブラッディ・デステイニーガンダムとストライク・アルビオンガンダム。

お互いにまだ動く気配は無い。

ハク「本当にいいのか？ヴァルク」

ヴァルク『お願いします！』

ハク「了解、本気で行くぞ！！」

ヴァルク『こっちだって！！』

今、戦いが始まった。

まず、先攻はヴァルクのB・デステイニーだった。

ビームライフルショーティーで牽制を掛ける。

S・アルビオンは微妙な動作で全て回避する。

しかし、B・デステイニーは、接近してアンカーを射出する。

ハク「ッ!?!」

S・アルビオンは足に絡まったアンカーをMVSで断ち切る。

しかし、その隙を見逃すヴァルクではなかった!

ヴァルク「デリヤアアアアアアアアア!」

B・デステイニーのバルマ・フィオキーナがS・アルビオンの顔を捉えていた。

しかし、そのバルマ・フィオキーナがS・アルビオンの顔を捉える事は出来なかった。

なぜなら……ハクのS・アルビオンの前にデスサイズが居た。

佐助「何やってんの?俺も混ぜてくれよ!」

ハク・ヴァルク「いつの間!」

佐助「いやあ〜ここの（作者）人が出てくれって言われたからさ」

ハク「しかし、そのデスサイズは……」

佐助「ああ、コイツの名前は『スケイス』つまり志乃恐h……じゃなくて死の恐怖だ」

デスサイズ・ヘル・カスタムに乗る佐助。

ヴァルク「この状況で……」

佐助「おらよつと!」

スケイスのビームサイズがB・デステイニーの足を切るつとする。

ヴァルク「ツなんの!やられるわけにはいかんだよ!（クワトロ風）」

ハク「オリヤアアアアアアア!」

S・アルビオンのMVSがスケイスの腕を切る。

佐助「ツク!」

ヴァルク「お返しだ!パルマ・フィオキイイイイイイイイイイイイイイイナアアアアアアアアアアアアア!……!」

B・デステイニーのパルマ・フィオキーナがスケイスの頭に直撃した。

佐助「メインカメラが！」

ヴァルク「どうだ！……ッ！」

いつの間にか、B・デステイニーの腕が切られていた。

ハク「余所見とは……余裕のようだな？ヴァルク」

エナジーウィングをバサッ！と広げるS・アルビオン。

ハク「喰らえ！エナジーブレイク！！！」

……と言っても原作のスザクが使ってたウィングのエネルギーの雨と同じ。

スケイスとB・デステイニーはシールドでなんとか防ぐ。

（使わなくとも、ラミネート装甲やガンダニューム合金があるためある程度しかダメージは無い）

ヴァルク「これじゃあ……決着つかないな」

佐助「同じく」

ハク「以下同文」

三機は、一端攻撃をやめる……そんな時に不思議な音がした。

ハク「こっこれは墮天使の『ヒプノサウンド』……！」

佐助・ヴァルク「なんだとっ!!！」

ハク「ヴァルク、佐助、今は逃げる！時期に堕天使がやってくる！その前にこの場からすぐに離れる!!！」

ヴァルク「いや、このB・デステイニーならやれる！」

佐助「俺のスケイスだつて！」

ハク「悪いが……堕天使を倒せるのは機械天使アクエリオンだけだ……悔しいが今の俺達では勝てない」

堕天使とは、アニメ「創世のアクエリオン」に出てくる敵キャラ。

人間のプラーナを集めて、収穫しているとの事。

そして、それに対抗できるのが機械天使アクエリオン。

三つのベクターマシンに、三人の搭乗者の三位一体となって戦う。

ハク「だから……ッ！」

ハクの目の前に、骸骨の顔をした……その名もケルビム兵が出てくる。

しかも、一体ではなく、三十体のケルビム兵にハク達は囲まれるの

であった。

ハク「ここまでか……」

ヴァルク「そんな……」

佐助「ちくしょー……………!!」

ケルビム兵のツメの攻撃がハク達の機体へと向う、その数 三百もの攻撃が……。

そんな時に男の声が聞こえた。

『唱えよ』

ハク・ヴァルク・佐助「……ッ!」

『唱えよ……創世合体!』

ハク「やれるか?ヴァルク、佐助」

ヴァルク「ああ!」

佐助「やるさ!」

アクエリオンの前に一つの剣が現れる。

ハク「太陽剣!!行くぞ!」

ハク・ヴァルク・佐助「うおおおおおー—————!!」
「」

次々とケルビム兵を倒していくソーラーアクエリオン。

背中の翼のような所には金色の粒子が出ていた。

ハク「これで十二体目!!」

時間が過ぎていくと同時にケルビム兵を倒す。

終わったあと

ハク「これで三十体目……終わり」

ヴァルク「ふう……やれやれだ!」

佐助「まったく、面倒な事はこりこりだぜ」

それから、三人で居酒屋に行き、男同士で色んな語り合いをしたのはまた別の話。

ヴァルク「じゃあ、またな、ハク！」

佐助「またな、ハク」

ハク「おう、二人ともまた来てくれ！」

こうして、楽しい時間は短く終わりを告げた。

あとがきコーナー W W W !

作者「どうも、皆様……始めまして！そうじゃない人もいますけど……」

ハク「っで？これはどういうことだ？」

作者「なにが？」

ハク「お前は、どうしてデスプラさんのマネごとをしているんだと

聞いている」

作者「ん、それなんだが……楽しそうだったからww」

作者「だって、この小説まだ始まったばかりなのにもうお気に入りにしてきている人がいるんだよ？」

ハク「まあ、それは嬉しい限りだな」

作者「うん、そこで、デスプラさんみたいな楽しい事もやってみようと思ったわけよ!!」

ハク「そうか……そういえば気になったんだが」

作者「何かな？」

ハク「今回はなぜ、本編ではなく、特講という形になったんだ？」

作者「実は……」

ハク「実は？」

作者「適当に思いついたからやってみたww」

ハク「……そこに直れ、馬鹿作者」

作者「ちよつハクさん？そのMVSはちよつと危険かなあ〜な〜んて（汗）」

ハク「ふむ、大丈夫だ…すぐに終る」

第4話「ココアってココナッツミルクから出来てるんだよ？」（ウソだけど）」

あれから、約4年の月日が流れてた。

俺こと、神凧白牡丹は十九歳になり、管理局では一等陸尉の階級が与えられてる。

なんで、一等陸尉かという俺の戦闘方法が接近戦で陸の場合が多いからだ。

空は飛べるが、あまりしない。

なぜか？そりゃあ……あれ？特に理由なんてないような……まあ、そんなとこだWWW。

ハク「さて、雇気楼セットアップ！」

手には、短剣を持つ。

屋気楼は、初期の装備は短剣でセカンドモードでは大剣になる。

サイドモードがあるんだが……使った事は一度も無い。

まあ、管理局に情報を渡さないのと秘密兵器は最後までとっておく事にしたからだ。

ハク「じゃあ、任務開始しますか……」

そういうと魔力を足に集中させて、爆裂な加速を出す、名前で見つなら『スピードキッド』と俺は呼んでる。

ただし、これは俺にしかできない魔法だ。

爆裂的な速度を出す代わりに、莫大な魔力と体力を使う。

まあ、チート野郎にしか使えない技って所だな……。

現在、違法施設の駆除の任務でここに居る。

まあ、予想道理に、何人かの実験体と研究者とその護衛を全て片付けるのが俺の任務。

とりあえず、通りすがりに護衛の五人を殺す。

あーちなみに、俺は殺す事に躊躇なんて無い。

物事に冷静になれなきゃあ仕事なんて出来ないさ。

それに、俺の世界（なのは達の故郷のこと）がどんだけ甘いかどうか……ここに来てわかったしな……。

ハク「でも……なんかままならないよな……ほんと、世界はこんなはずじゃなかった……だよな」

それからも、研究者は殺して、無事な実験体（子供）は連れて行く。

それが終わり、外に出る。

ハクは子供たちの方に視線を向け、同じ目線の高さまでしゃがむ。

ハク「さて、キミ達、これから管理局の人達が来るから此処で大人しくする様に、いいね？」

子供達「……はーい」「……」

子供の一人「お兄さんはどうするんですか？」

ハク「俺はこれから、あの施設をなくすんだよ？じゃあ、またね」

そう言つてハクは施設へと戻り、施設に爆弾を仕掛けて、護衛や研究者の遺体と共に葬り去る。

ハク「安らかに眠れ……この地獄の業火で全て……」

フェイトサイド

それから約三十分後に時空管理局のフェイト・T・ハラOWN執務官が現場に到着した。

子供たちを保護して、現場に向ったが……。

フェイト「なにこれ……」

そこには、あつたはずの物が全て灰となっていた。

黒焦げになった部分もあり、相当の火力でやられたと推定できる。

フェイト「はやてに知らせないと……」

すぐさま元の場所へと戻るフェイトだった。

ちなみに、子供達はハクの事は言わなかった。

ただ、自分達は逃げ出したとしか言ってない。

フェイトサイドアウト

ハクサイド

今、現在、事務処理中。

カタカタカタツカタカタツカタ

キーボードの音が部屋に響く。

カタツカタカタ……バキッ。

ハク「仕事が多いんじゃないあー……ボケエエ……」

それもそのはず、なぜなら俺の上司バツカス提督の仕事もあるからだ。

あの人は何かと俺を雑用に使う……。

まったく勘弁して欲しい。

そついいながら、資料を整理していると一つの手紙があった。

『機動六課設立により、バツカス・ゲリアル提督の補佐である神
凧白牡呂さんをこちらに派遣させて欲しいです。部隊長 八神はや
てより』

……。

見なかった事にしよう……嫌な予感しかしねえ……。

その手紙をゴミ箱に捨てようとしたら……。

ウィン ドアが開く音。

バツカス「いやあ、ワリイな俺の分までやってもらって……ん？手
紙か？」

こうして、俺は機動六課に転属となった。
（ちなみにバツカスを痛
め……O H A N A S H Iをした）

第5話「機動六課……女性率高けえ……」

機動六課のエントランスにて。

ハク「さすが……というべきなのか？」

まるで新築……いや確かに新築だが……ここまでやれるのか？

ハクはとりあえず受け付けの女性に話をかける。

ハク「すみません、八神部隊長に呼ばれた者なんですが……」

受付「あっはい……神風白牡丹さんですね、ではこの案内で部隊長室に行ってください」

言うと同時にパソコンの画面みたいのが出てきて機動六課の地図

が書いてあり、矢印が指してる方向にあると言っ事だろっ。

ハク「ありがとうございます」

受付「はい」

それから、道端で知り合いのヴァイス陸曹と会い、軽く挨拶をして
部隊長室に到着した。

トントントントと叩く。

『はい、どござー!』

ハク「失礼します、私は神凧白牡丹一等陸尉であります!よろしく
お願いします」

はやて「機動六課部隊長八神はやてです、よろしく」

ハク「はッ」

敬礼するハク。

はやて「そんな硬くならんでいいんやで？小学校からの知り合いな
んやから」

ハク「いえ、『親しき仲にも礼儀あり』というのが基本でしょう？
部隊長殿」

はやて「どうでもええやん、それにすずかちゃんの思い人（私もや
けど）がここにいるなんて……灯台下暗しって言えばいいんかな
？」

ハク「さてな……それに関してはバツカス提督に言っ
て貰いたいの
ですが？（どうでもいいのかよ）」

はやて「そやな……ハク君にはライトニングの副隊長になっ
てもら
うで……シグナムがよく出張になるさかいな」

ハク「了解、ちなみに……俺の事はあいつ等なのほとフェイトは知っ
てるのか？」
敬語が面倒になってきた。

はやて「面白そうやから言っ
てへんwww」

ハク「相変わらずだな……」

呆れ気味の顔で言うハクであった。

そこにコンコンとドアを叩く音がした。

なのは「高町なのは一等空尉と」

フェイト「フェイト・T・ハラオウン、入ります」

はやて「噂をすればって所やなww」

ハク「はぁ……」

なのは「えっと……どちら様ですか？」

俺がなのは達に顔を向けるとなのは達は驚いた顔をする。

ハク「神凧白牡丹一等陸尉、ライトニングの副隊長になります」

と敬礼しながら二人に言うと……なぜか二人は泣いていた……。

ハク「えっ？」

二人は無言で俺に近付き、抱きついて来た。

なのは「……よかった……本当に……無事で」

フェイト「うん……」

ハク「……すまん」

それから、しばらく時間が経ってから離れる。

なのは「さて、改めてよろしくね、ハク君」

フェイト「よろしくね、ハク」

ハク「ああ、これからも頼む」

はやて「じゃあ、挨拶はそこまでにして……これからの日程を伝えるで」

新人挨拶やこれからの事についてなど内容を話していく。

それから、原作道理にシグナムが来て、それから新人たちの挨拶に向うのであった。

当然グリフィス君も来て挨拶は済ませた。

俺は、密かに新人達の資料を見る。

スバル・ナカジマ ティアナ・ランスター エリオ・モンディアル
キャロ・ル・ルシエの四人。

それぞれ、育てたら化けるような奴等と俺は思う。

だが、後ろの2人に関しては、学校に行ってもらいたいとも思っている。

学校で色々な経験をしてからでも遅くはないはず……保護者はフェイトだったよな……。

ふむ、たぶん……二人に「フェイトさんの役に立ちたい」とか言われて管理局に入れたんじゃないのか？

と考えていたら、いつの間にか挨拶は終わっていた。

はやて「じゃあ、以上で解散。各自で部屋に戻ったり、仕事場に戻ったりしてください」

そういうと、皆バラバラになる。

ちなみに俺もすぐに自分の部屋に行こうとしてたんだが……魔王と

死神に捕まってしまった。

なのは「どこに行くのかな？」

フェイト「そうだよ？まだ話は終わってないんだから……」

今、二人の後ろには黒いオーラが見える。

ハク「できれば、部屋で休みたいんだが？」

なのは・フェイト「来てくれるよね？」

へビに睨まれたカエルとは、この事だろうか？

二人の殺気に俺は動けない状態だ。

だれかヘルプミー……！

なのは・フェイト「じゃあ、逝っつ」

その日、ハクを見たものは誰もいなかった。

次の日に、ロビーのソファでボロボロになっていた所を発見した。

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………』と言葉を
ずっと続けていたそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397s/>

転生者は時空（とき）を超えて～始まりの章～

2011年9月30日07時01分発行